

充電期間を過ごして

鈴木郁美

聖霊病院産婦人科病棟

浜元勝枝さん、ご紹介ありがとうございます。浜元さんとは聖母助産婦学校の同期生で、1年間いっしょに寮生活をした仲です。卒業後10数年たち、私たちの仲間も、家庭に入っている人、仕事を続けている人、独立して開業している人、それぞれの道を歩んでいます。

浜元さんは沖縄に帰り、現在は地域で活躍しているとのこと、頼もしいかぎりです。そんな彼女からの「りれー随筆」の依頼、頼まれたら後に引けない性格で、お引き受けしました。

助産婦としてのスタート

私の中で、少しずつ助産婦に対する興味が芽生えはじめたのは、開業助産婦の母が「女性であっても、手に職をつけたほうがいい」と口癖のように言っていたこと、そして大学1・2年の担任であった大沼(現・阿部)弥栄子先生が助産婦であったことなどが、影響していたのかもしれません。

職業として助産婦を意識しはじめたのは、大学3年時の産婦人科実習でした。生命誕生の瞬間に立ち会って、「自分の仕事はこれだ」と確信し、助産婦をめざすことにしたのです。

いろいろ迷いましたが、助産婦学校卒業後は故郷の名古屋にある聖霊病院に就職しました。配属は分娩室でした。昭和50年代当時、分娩数は1,500前後あり忙しい毎日でしたが、仕事が好きで毎日毎日が充実していました。

先輩には、3万例を介助なさったシスターもおられ、分娩介助のテクニックだけでなく、

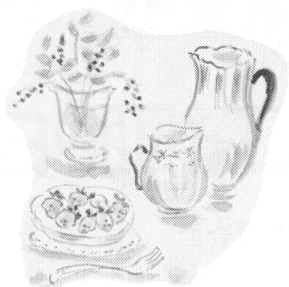
「自分の全能力を傾け分娩にあたること」「自分の力の限界を知り、自己に頼らず謙遜に行動すること」など、数々の助産婦としての心得なども学ぶことができました。

また、当時母乳外来を開設し、助産婦業務の拡大に意欲をわかせ、助産婦一同、一致協力して目的に向かったことなど忘れることのできない思い出です。

ジレンマ

10年の分娩室勤務の後、病棟勤務になりました。後輩の育成指導、学生指導、褥婦指導に加え、中間管理職としての仕事もあり、1年目は新卒スタッフと同様、業務に慣れるのに精一杯でした。2年目から余裕が出てくると、今度は毎年入ってくる若いスタッフと年代のギャップを感じはじめたりしました。「新人類」と言われている彼女たちを、先輩としてどのように育成したらよいのか、悩んだものです。

雑巾ひとつ絞れない若い人が多くなっています。家庭での基本的なしつけ教育の大切さを痛感し、子育て真最中の我が身を振り返ることもなりました。スタッフ教育は子育てと似ている点が多く、子供が親の姿を見て育つように、スタッフも上司・先輩の姿から影響を受けるのです。「相手からしてほしいと思う態度、相手に取らせたいと思う言動を、まず自分が実行してみる」ことが大切であり、教育の基本となる自分自身の看護観を常に明確に認識しておくことも必要になります。



馬場まさ子先生の講演で、「看護とは、命を慈しみ育むこと。その人らしく花開くよう、あくまで患者サイドに立ち、100%のかかわりを持ち、熟慮して、可能性を信じる力を発揮してケアすること、知識・技術だけではすばらしい看護婦とはいえない。心のこもったケアが必要であり、人格と人格の出会いの中で、看護を通して、自分自身も成長することができる」という話を聞きました。とても印象的で、自分の看護観を振り返らざるをえませんでした。

充電期間の産休

今、私は3回目の産休を迎えています。無我夢中でつっ走ってきた自分にとって、約14週のお休みは何かホッとするものがあり、仕事を離れても専業主婦として忙しい毎日ですが、出産という女性にとっての大事業を前に、少しばかりの心のゆとりがもてるものです。

今回の大事業では、39週に入って前駆陣痛が夜間始まりました。出産当日(40週4日)18時過ぎから陣痛が5分間欠となり、入浴し身体をリラックスさせ、いつものようにあぐらを組み、圧迫法で腰痛をやわらげました。夫の担当である圧迫法は実に効果があり、私の出産には欠かせず、いつも感謝しています。助産院は我が家のすぐ隣にあるため、陣痛1～2分になってから行き、私の母と夫の立ち会いのもと、無事男児を出産することができました。3人目とはいえ、出産したときの安堵感は何にもたとえられないものです。

今回の出産・育児を通して、自然のメカニズムを身体で感じ、自然の偉大さを再確認しました。また産休中は、どっぷりと仕事の中につかっているときと違い、第三者的に仕事のことを考えることができ、よいアイデアが浮かんだり、自分の子育てについても考えたりすることができます。

今回、もうひとつ自然の偉大さを感じたことがありました。それは電力会社の修理のため夜間3時間ほど停電になったときのことです。授乳のため起きてみたら、あたりは暗闇、日頃電気の明るさに慣れているので、身動きが取れなく困っていると、雨戸のすき間から月の光。雨戸を開け、月の光のもとでオムツを交換したのでした。久しぶりに、月の光の明るさを思い出したひとときでした。

人間は、同じ道を歩き続けていると、その道しか見えなくなり、他にもできている道を、自ら見失っていることがあります。他の道を見失わないためにも、人間にはある程度の充電期間が必要だと思いました。今回産休という充電期間を得て、この間に考えたこと感じたことを、これからの仕事に活かしていきたいと思っています。

* * *

次回は、分娩室勤務のとき、1年余りいっしょにお仕事をした、いつも笑顔のたえない池田容子さんにバトンタッチいたします。京都に住み、現在フリー助産婦としての道を歩みはじめた彼女に乾杯！ 心から応援いたします。